

[1]

氏名	韓一瑾
博士の専攻分野の名称	博士(文化交渉学)
学位記番号	文博第207号
学位授与の日付	平成25年9月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	近代における言語接触と中国語造語法の研究
論文審査委員	主査教授 内田慶市 副査教授 日下恒夫 副査教授 奥村佳代子 専門審査委員教授 沈国威

論文内容の要旨

本論文は近代欧米人の編纂した英華字典のうち特に『官話』(1916)に記載されている訳語を中心対象として、言語接触と中国語造語法の考察を行ったものである。

序章では中国語と他の民族や国との言語接触の歴史を遡り、近代における直接的、間接的言語接触が中国語にいかなる影響を与えたかについて論じている。とりわけ「日本語の影響」については、その交流の歴史を三つの段階に分けて詳しく説明している。また、これまでの中国語造語法の研究についても概観した上で、なぜこの『官話』を取り上げるのかを、その研究価値について論じている。

第一部は現代中国語における音訳語とその造語法について論じているが、「音訳」と「意識」の関係、「音訳」と「中国語造語法」の関係等について、これまでの研究成果を踏まえながら、本論文の研究意義を述べたものである。

第一章では『官話』(1916)に収録された音訳固有名詞を研究対象とし、第一節ではそれを翻訳方法により「純音訳語」、「半音訳半意識語」、「音訳+範疇を表す形態素」の三つの種類に分類した。第二節は音訳語の音節数と造語法の関係について考察している。さらに、音訳語の音声と方言の関係についても考察を行い、音訳語の音声から見れば、南方音から北方音に、中古音から現代音に変わる傾向があることを証明した。この他、本章では、翻訳用字と翻訳方法の変遷と音訳造語要素の形成についても述べているが、音訳語用字になりやすい漢字や、「形旁」の役割、漢字間の組み合わせなどについて音訳語用漢字の特徴を詳しく論述している。

第二章では音訳専門用語と造語法についての考察を行っている。特に、専門用語を学術分野ごとに「化学」、「物理学」、「地理学」、「生物学」、「医学」、「機械学」に分け、同じ分野における音訳語語形が統一されていたかどうかについて述べている。また、翻訳方式から見れば、純音訳の方式で音訳語を創出する傾向と半音訳半意識の方式で音訳語を創製す

る傾向がある分野によって異なっていることを指摘している。また、語形の定着はその音訳語の類推機能を発達させ、さらに造語要素になれる必要かつ不十分な条件であるという点も指摘した。

第二部では意識語と造語法の関係について詳しく論述している。まず、第一章では、漢字使用頻度の調査により、当時の意識語に生産力が高い造語要素がすでに存在していたことを証明した上で、次に意識語を現存語と廃語に分け、現存語は「性」を例として英語原文、日本語訳語、官話（1916）の訳語の三者を対照し、意識現存語の造語要素の形成過程には英語、日本語両方の影響を受けたことを立証した。廃語は「質」、「精」、「素」を中心に、当辞典に収録された「質」、「精」、「素」類新語、部定語の他の訳語や『英華大辞典』（1908）の訳語と対照して、それ以前の訳語は語彙ではなくフレーズで表しており、音訳の場合、「質」、「精」、「素」を利用して新語を作る傾向があることを述べた。

第二章では学術用語を中心に、新語を再分類し、各分野における語数統計、語彙の長さの統計及び字頻統計を行った。また、自然科学、社会科学という順番で、それぞれの学問領域から一つ分野を選び、それらの用語について調査を行った。第一節では生物学専門用語、第二節では言語学専門用語について論述した。

第三章では品詞分類や品詞転換の角度から中国語の造語法を検討している。また、新興品詞である区別詞を中心とした語の当時の発展状況や、「性」、「等」などの区別詞性格を持つ接辞の形成状況について考察を加えている。英日中を対照し、区別詞が英語書籍の中国語翻訳を通じて形成されたものであったとしても、中国語の新興区別詞は日中言語接触のもと、両国の語彙交流や受容のプロセスにおいて形成されたという結論を導き出している。

以上が本論文の要旨であるが、『官話』（1916）に記載されている訳語を中心対象として、音訳語と意識語二つの方面から当時の中国語造語法の発展状況、中国語の造語法と英語、日本語の関係を解明したものである。

論文審査結果の要旨

本論文は、近代中国における新しい概念の受容と、それに伴う新しい語彙の創出とその定着の過程を、『官話』というこの時期の中国語語彙の規範化において極めて大きな影響力与えた辞書での「翻訳語」を網羅的に検討し、言語接触の観点及び造語法と現代中国語の規範化をも視野に入れながら、中国語における「翻訳語」の本質に迫ろうとした意欲的な論考であり、新しい知見が多く示されている。

たとえば、先行研究を十分に検討した上で、先ずは音訳固有名詞を取り上げ、その翻訳形式を「純音訳語」、「半音訳半意識語」、「音訳＋範疇を表す形態素」の三つの種類に分類し、それが語彙の内容の違いでその翻訳形式の違いがあるかどうかについて考察しているが、こうした語彙の内容の違いにまで踏み込んで音訳語を分析するということはこれまで見られないものである

また、「翻訳用字と翻訳方法の変遷と音訳造語要素の形成」、「音訳専門用語と造語法」、

「意識語と造語法」というように近代の翻訳語を様々な観点から取り上げ、そこから自己の結論を導き出している。品詞分類や品詞転換の角度から中国語の造語法を研究するという試みも本論文の一つの大きな特徴である。特に、新興品詞である「区別詞」のこうした「翻訳語」という角度からの研究はこれまで全くなかった斬新な方法である。

いずれにせよ、辞書に収録されている語彙を一つ一つ丹念に検討を加えるという気が遠くなるような地道な作業に裏付けられた結論は説得力をもつものであり、それがこの論文の評価すべき点の一つでもあるが、近代における東西の言語文化接触と中国語翻訳語の研究の新たな地平を切り開くものであると高く評価するところであり、よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。